

天明釜再考

—その造形および編年を中心に—

平 竜次 浅草寺

本発表では、現在の栃木県佐野市に位置する天明で制作された茶の湯釜—天明釜を考察の対象とする。天明釜は主として無文であり、荒れた釜肌や異形な姿といった特徴を有する。その素朴ながら野趣溢れる姿は茶人の心を惹きつけ、「西の芦屋、東の天明」の言葉の如く、芦屋（現在の福岡県遠賀郡芦屋町）で制作された芦屋釜と並び、関東を代表する茶の湯釜として称賛を浴びてきた。

しかし、名声とは裏腹に、天明釜の研究はほとんど進展していない。その理由として、文献史料や基準作など、情報源となる資料類が圧倒的に不足していることが挙げられる。このような状況下で、鈴木友也氏や原田一敏氏らの先学は、これまで僅かな文献史料を基に天明釜の実態の解明を試みてきたが、未だ多くの謎に包まれている。一方、芦屋釜については近年研究が飛躍的に進展しており、その成果は茶の湯釜研究に新たな示唆を与えている。それは、天明釜研究においてもまた、十分援用できるものと発表者は考える。

よって、発表では「天明極楽律寺尾垂釜」（文和元年・1352年銘、重文、大阪市立美術館蔵）をはじめ、実査の機会を得た天明釜を細部にわたり分析することで、これまで言及されてきた特徴を再考する。その際、芦屋釜研究で注目されている観点を中心に分析し、各作品を相互に比較することで、新たな造形的特徴を浮き彫りにする。その上で困難とされていた編年について試案を述べ、天明釜の実態を明らかにしたい。

作品分析では近年の芦屋釜研究の成果も踏まえ、口造り、肩の曲線、釜肌などに注目した。例えば、姿が類似した天明釜同士を比較すると、一見差異がないように見られるが、詳しく観察すると造りの程度に明らかな違いが見られた。つまり、精緻に整えられて制作された作品から、造形に緩みを見せる作品まで開きが見られたのである。そして、この造りの程度差は、制作期の差にもつながる可能性があると考えられる。

以上の分析結果を踏まえ、天明釜の編年を三期に区分する試案を提示する。その中で、これまで天明釜の典型作例と言われてきた作品群は、第二期に位置することを指摘する。そして、それとは別に、制作期がより遡り得る第一期作品群が存在することが判明した。しかも、この第一期作品群は天明釜全体において特に精緻に制作されたもので、室町時代まで遡り得る芦屋釜の特徴とも一致する点に注目したい。更に、第三期作品群には水指や南蛮渡来のやきものなど、他分野の工芸作品に類似する造形を有する天明釜も確認できた。

第一期作品群が物語る如く、天明釜の造形は古作であるほど、芦屋釜のそれに近似することが明らかになった。芦屋釜が室町時代より京の貴人に賞玩されたことを勘案するならば、「日常使用の雑器の転用」という、従来の天明釜への見方は再考すべきである。本発表にて近年の天明釜の作品調査を踏まえ、新たに得られた研究成果を提示する。

(たいら・りゅうじ)